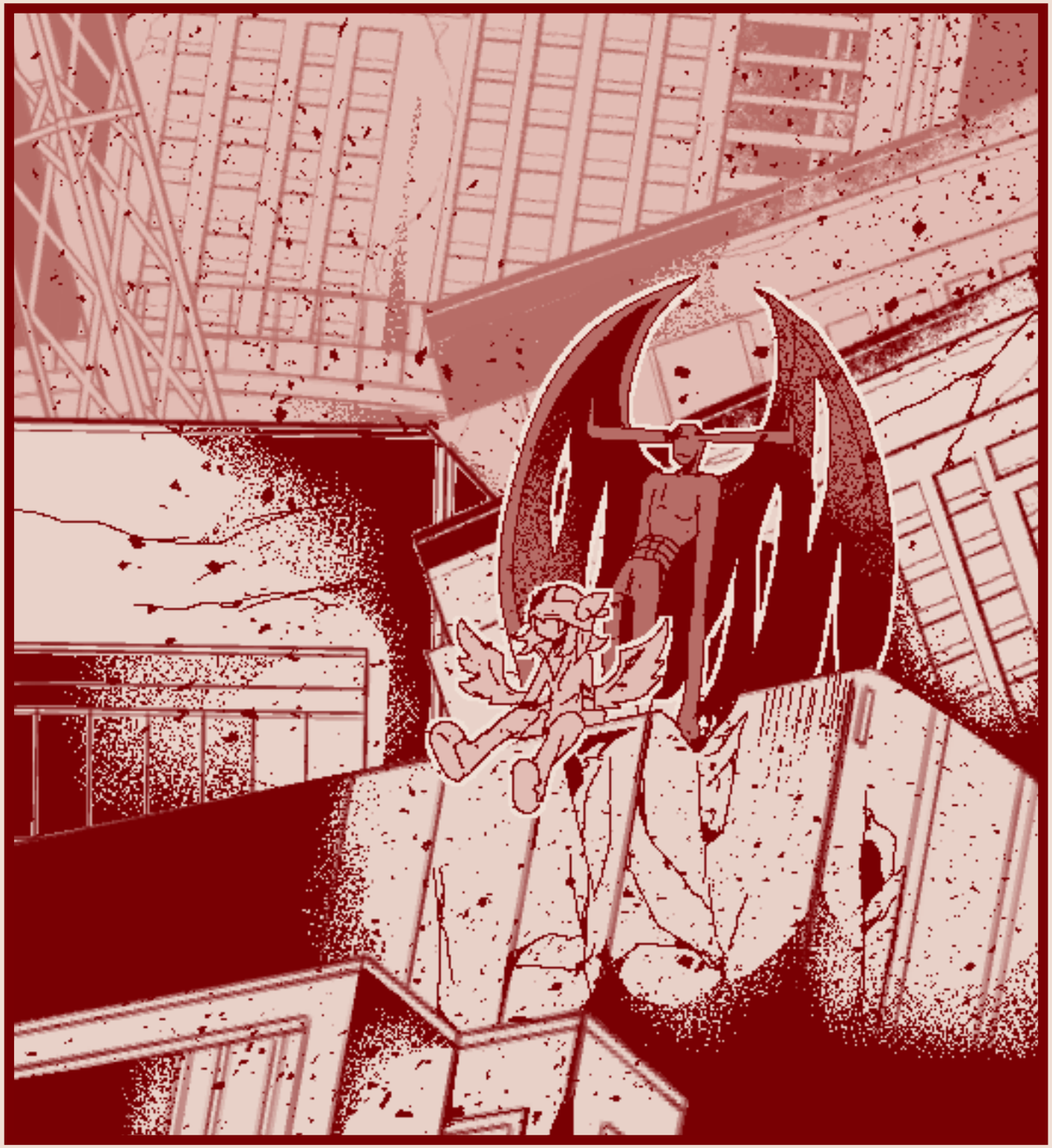


1

「手痛くやられたようだな。」
　ハシュマモンから勇太と分離した後、遠方から勇太達のいるトレイルモンを監視していたルクスモンにデビモンが背後から語りかて来た。
「やぁ、本当だよ…あの猿顔の人間、思いっきり殴ってくれちゃって。」
「これも計画の内か？」
「勇太と分離するのは計画の内だけど、大分狂わされたよ。
　本当ならあそこでトレイルモンにいる人間とデジモンを半数くらいは殺した後に分離するつもりだったけど…。
　まぁ、それでも最初の一撃で勇太達側のデジモンもそこそこ殺せたろうし保険は一応ってとこだけど。」
「その保険の為に、こちらにも大きな損害を出したのか？」
　デビモンが差す様な視線でルクスモンを睨みつけた。
「やだなぁ、そっちにはあの淫売、こっちは勇太を貰うのに協力しよう。とは言ったけど、やり方はお互い口出さないって約そ…まぁ暗黙の了解だったでしょ？」
「…これでその関係は終わりか？」
「まぁね、もう少しでラッパが鳴る。
　こっちも君達を殺しに掛かるし、そっちも気兼ねなくやりなよ。」
「…そうか、計画の修正に付き合わされると思っていたよ。」
「流石に悪いし、お互い対面だってあるだろ？
　戦争状態の悪魔と天使が密会なんてもう誰も目を瞑ってくれないよ。
　大丈夫さ、勇太は黒蜥蜴も自身をデジモンにして闘うためのデジヴァイスも奪われた。
　周りに協力を申し込んでも、味方の大半を殺したし、トレイルモンにいる人間も殺しかけた…誰も協力しないさ。
　三上 竜馬達はギリギリまで助けようとするだろうけど、デーモンとの力量差、その後に淫売を殺さないってハンデ付きでガルフモンと殺らなきゃいけない。
　世界の命運と天秤に掛けるギリギリの局面だと…まぁそれを勇太も分かってるから最初、別行動したんだしね。
　僕を憎んで、憎んでもあの淫売を求める限り、僕だけが頼るしかない。
　ハシュマモンになって、勇太は僕をの全てを理解して受け入れきゃいけない。
　…いかに、理想を語ろうとも目の前の現実には、憎い相手の手を取らなければならない。
　僕達と同じさ、1度だけなら引き返せると思ってももう…堕ちるしかないのさ。」
「…そう上手くいくかな？」
「そう、あの猿顔の人間が与えた希望。
　それを受け取った勇太はもしかしたら…。
　…だから次の手も考えとかないとね。」
「…では、これで私は去ろう。」
「次会う時は、殺し合いだね。
　手加減してってデーモンにも言っといて。」
「…馬鹿を言うな。」
　言い残すとデビモンは一瞥もしないで消えていった。
「…じゃあね、友達。
　できれば僕の知らないとこで死んでね。」
　ルクスモンはひとり呟いた。

2

竜馬とすみれに助けられた勇太は、ルクスモンの思惑通りに他のデジモンからのいき過ぎた叱責から遠ざけるため、後方のトレイルモンの客室にサンドリモンが外で警護しつつも、半分幽閉の状態でいた。

叱責というのは、それをする側の弁。

当人達も今は、最初は、とそのつもりでも結果としては、私刑（リンチ）による惨殺になると言葉にせずとも誰もが理解できた。

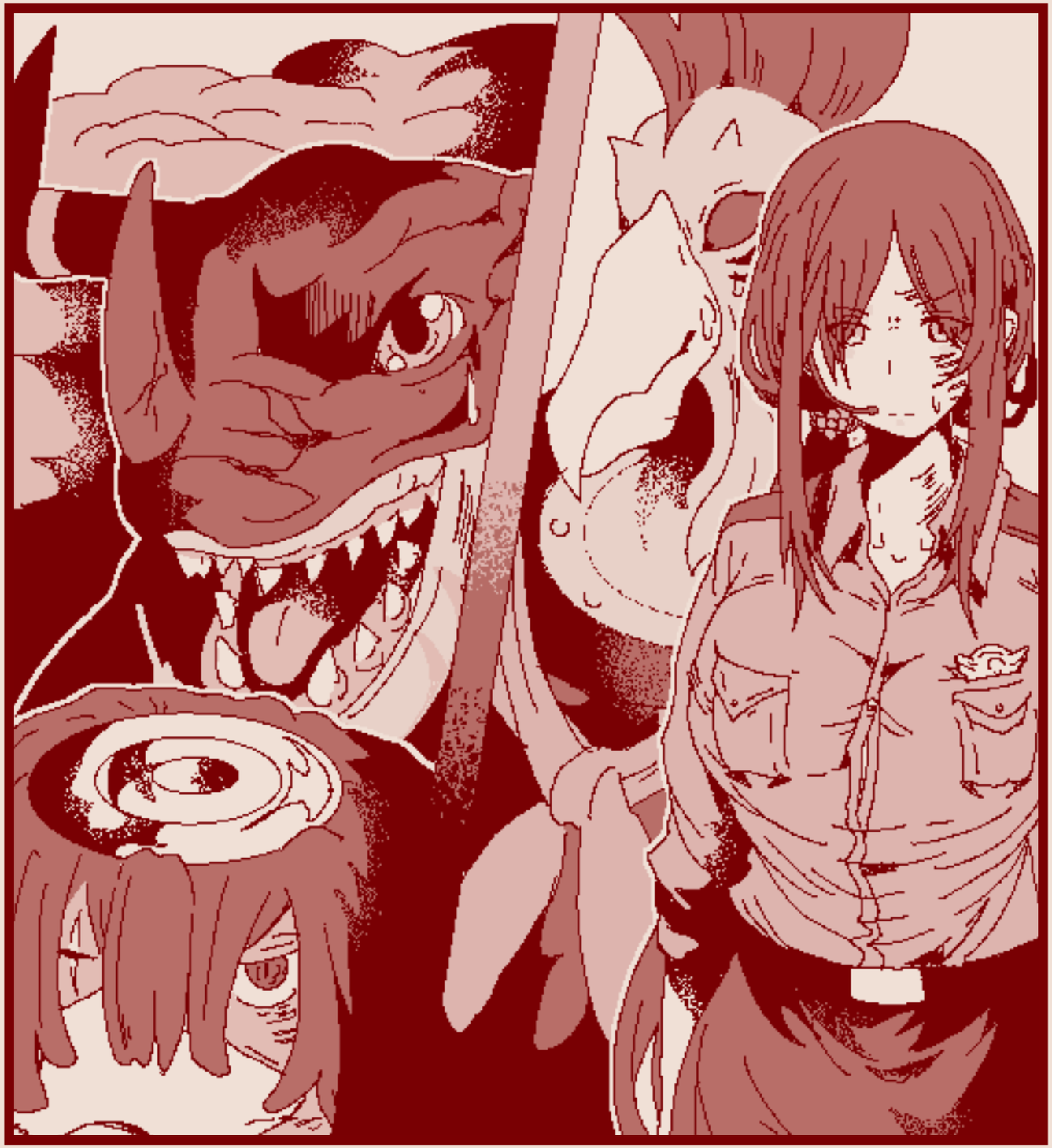
明かりも付けず暗闇の中で勇太はただぼんやりとしていた。

自身の味方から敵意を向けられる今、正直に言えば勇太にとってこの状況はありがたかった。

様々な出来事が一気に起き、勇太自身のキャパシティーをオーバーしていたからだ。

ただ、起きたことがフラッシュバックするたびに膝を抱え誰に向けるでもない謝罪をしながらむせび泣く。

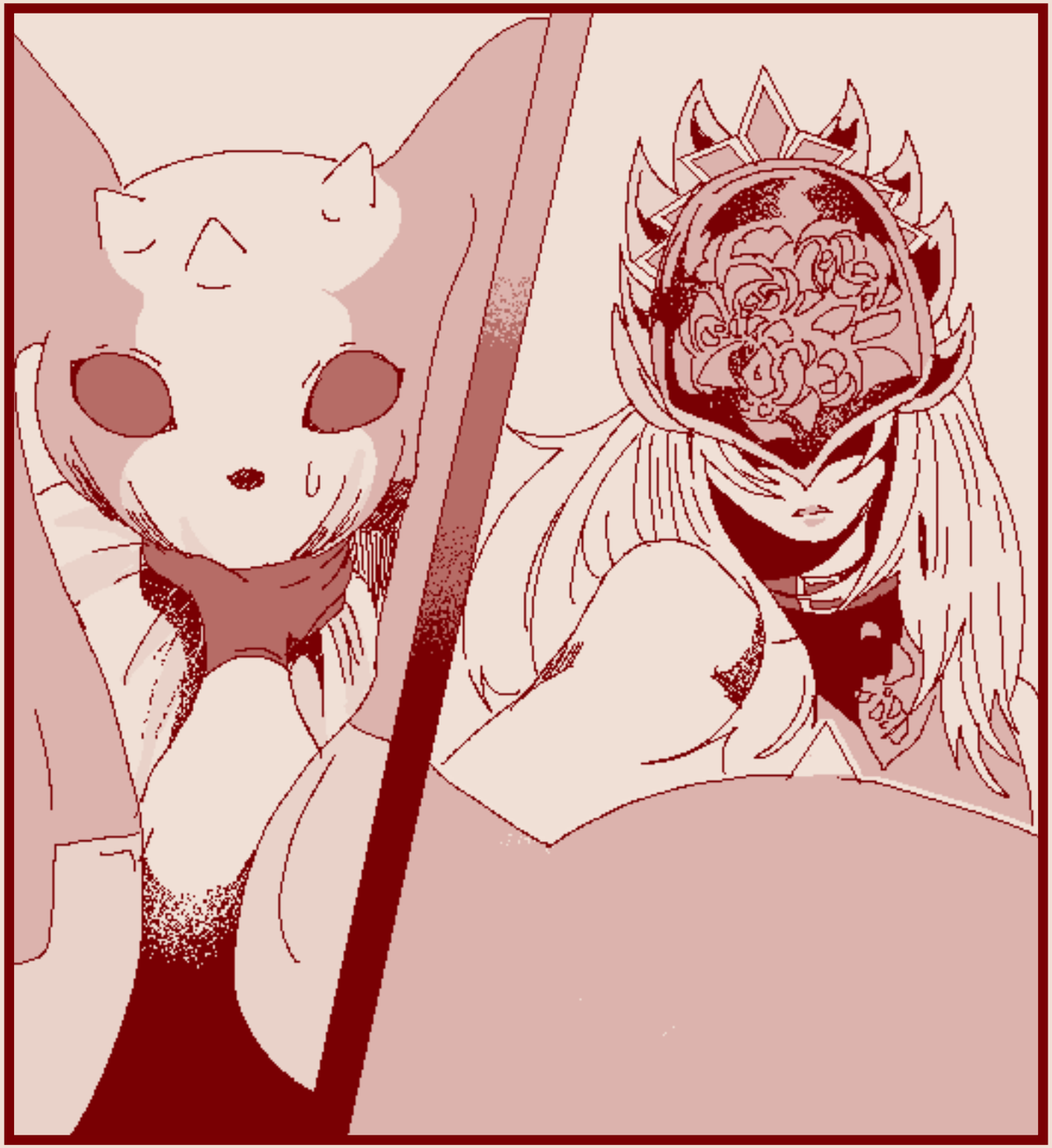
そしてまた、抜け殻のように項垂れる事を繰り返していた。



3

「現在、あのデジモンによる攻撃で、半数近くの味方が戦死したと思われます。
　ただ、同時に敵はそれ以上に倒せ、オグドモンへの攻撃でデザイアリングの発生もなくなっています。」
　すみれが淡々と味方のデジモン達へ状況を説明する。
　あのデジモンとは、無論ハシュマモンの事である。
　すみれが、ハシュマモンの事を勇太と結び付けず、速やかに濁し話題を処理した事は、指揮取る者にとって無用の混乱を避けるのもあるが、大きくはすみれ自体のストレス回避のための無意識の行動であった。
　過去の選ばれし子供であり警官であるタフさをもってもそれを疲弊しきった状態では、否、そういった背景があるすみれだからこそ、事情の推察できる勇太への攻撃は耐えれなかった。
　それは優しさでもあるが、今この場では悪手であり、甘さであった。
「そこで、今度こそ全戦力でデーモンと戦います。」
「だけどよ、また後ろからズドンと撃たれちゃたまらねえぜ。
　あの赤髪のガキは殺すべきなんじゃないか？」
　グレイモンが作戦の説明をするすみれに喰って掛かる。
　着火の切っ掛けはすみれが勇太の名前を存在を最小限にして避けた事であった。
　指揮を取る者に取ってはとるべき方法であるが、現地で戦っていた者には、勇太はヴィランそのものであった。
「おい、勇太がワザとやったって言いてえのかよ!?」
「事実を言ったまでだ!!隣にいたダチが…あの場にいた大勢が一瞬で死んだんだぞ！
　それに、ワザとじゃねえならなおさらタチが悪いだろ！
　外的要因でいつ爆発するかも分かんねえ不発弾を抱えて戦えって言うのかよ！身内だか知らねえけどなぁ！てめえらのお友達ごっこで死ぬなんてまっぴらなんだよ！」
「ああ!!??」
　クロウとグレイモンが一触即発の状態になり、デジモンや人間達も全員言葉を詰まらせていた。

　その後、数時間に渡り感情を主軸とした話し合いが展開され、
「まぁまぁ、落ち着けってじゃあこうしようぜ。
　状況を見るにあの天使が接触しなきゃ大丈夫だ。
　勇太はそのまま監禁、見張りも付けて天使と接触するようならすみれさんと協議してどうするか決める…それでいいだろ？」
「協議なんてしてる暇なんてないだろ！見つけ次第だ!!!！」
「…。」
　暫く慎平とグレイモンを中心に協議した結果、トレイルモンの客室にルクスモンが近づくのを確認した瞬間に勇太を殺すという事で決着となった。
「慎平、お前どういうつもりだ!?勇太を信じてねえのか!?」
　協議が終わった後、クロウが慎平に掴み掛かる。
「ぎゃ…逆だよ、クロウ君。
　寧ろ慎平君助けたんだよ。」
「あぁ!?どういうこっちゃ雪奈!?」
「…ふっクロウの頭じゃ分からないみたいだね（私も分かんないけど。）」
「最初の話を思い出してみろ、勇太を今殺すかどうかをルクスモンが近づくかどうかに話をすり替えてるんだ。」
「そういう事。
　ただ、これ以上はもう俺らじゃどうしようもできないけどな…。
　俺達だってデーモンに今度こそ勝たなきゃならねえ。
　勇太や…光の事を助けてやれる事はできねえ…。
　後は、勇太次第だ。」
　悔しそうな慎平の肩に竜馬が手を置く。
「…あいつなら大丈夫だ。
　選ばれし子供の件を黙っていた立場で、無責任かもしれんが、俺はそう信じてる。
　慎平は？」
「…俺だって。」
「今は、我々に出来る事を考えよう…リベンジマッチは半日しかない。
　やれる準備はしとかないとな。」



4

「いいんですの？勇太様とお話さなくても？」
「…サンドリモン、見張りは？
　皆んなが皆んな勇太様のお敵ではありませんわ、お信頼できそうなお方にお代わってお貰いましたわ。」
　アンティラモンにサンドリモンが語り掛けてくる。
　アンティラモンも勇太と同じく打ちひしがれていた。
　自身の選択のひとつひとつが勇太達をこの状況に追い込んだ罪悪感に心という器に音を鳴らし始めていた。
　勇太と光、ヴォ―ボモンとデビドラモン。
　彼らは三大天使としての立場、そして生き物としての成熟さで庇護すべきものであり、同時にこれまでの旅で生活を共にした者として役目以上に彼らを好きになっていたからだ。
　そしてそこげ積み重なった経験からの罪悪感の為であった。
「…私には、その資格はない。
　勇太が選べれし子供でないと知りながらも黙っていた。
　そのせいで、今も彼らを苦しめている。」
「…とんだお不器用のお馬鹿チンですわね。」
「えっ？」
「貴方は勇太様のお仲間でしょう！
　お仲間ならやる事はひとつ！グチグチお言ってない腹割って話す！そうじゃないんですの!?」
「だが…。」
「勇太様は今、おひとりでお抱えきれない重荷を背負っておりますわ！
　なら少しでもそれを持ってあげるのがお仲間ではなくて！」
「…。」
　暫くの沈黙があった。
　アンティラモンはその間、思考し、天秤に掛け、ついに重々しくではるが、勇太の元へ歩き出した。
　サンドリモンの姿が見えなくなるその瞬間、小さくアンティラモンは呟いた。
「…ありがとう。」

…

「仲間ならお前でも良かったんじゃないのか？」
　アンティラモンを見送ったサンドリモンの後ろからベルスターモンが話しかけてきた。
「あら？お立ち聞きなんてお品のない事ですわね。」
「あぁ？」
「…お簡単な事ですわ。
　言葉通り、今の勇太様に言葉を届けるのは、お仲間にしかできない事ですからよ。」
　そう言い残すとサンドリモンもその場を立ち去った。
　拳は静かにだが、強く歯痒く握られていた。
　それがサンドリモンの気持ちであった。
「…おめえももう仲間だと思うけどな。」
　呆れたように小さくベルスターモンは呟いた。

5

「少し話がしたい、いいか？」
「アンティラモン…。」
　アンティラモンが手つかずの食事に目を向ける。
「…食事を取っていないのか？」
「…。」
　静かに勇太の隣にアンティラモンは座った。
「…。」
「…。」
　暫くの沈黙の後、口を開いたのは勇太であった。
「気付いてたの…？」
　何がには言及はなかったが、アンティラモンには何かについてすぐに分かった。
「確信を持ったのは、ウェヌスモン様がデジヴァイスを見た時だ…予感は最初からあった。」
「…慎平さんと竜馬さんも気付いてたんだよね？」
「すまない…。」
「なんで黙ってたんだよ…。」
「…君であって欲しかったんだ。
　あの時、ロップモンがウェンディモンになっても君は諦めなかった。
　私は一目で諦めてしまい殺そうとしたのに…。
　ウェヌスモン様のところで君が選ばれし子供ではないと分かった時、一瞬だが選ばれし子供を探す事も考えた。
　感情を抜きにするならそうするべきであった。
　だが…私の心は君に託したいと思った。
　他でもない君に…、君なら何か大事なものを救ってくれると思ったんだ。」
「じゃあ期待外れだよ…俺はこの様だ。
　それに、俺には分からないんだ。
　光は今のままで幸せなんじゃないかって。
　やっと、お父さんやお母さんといられるようになったのにそれを引き裂くなんて。」
「…。」

6

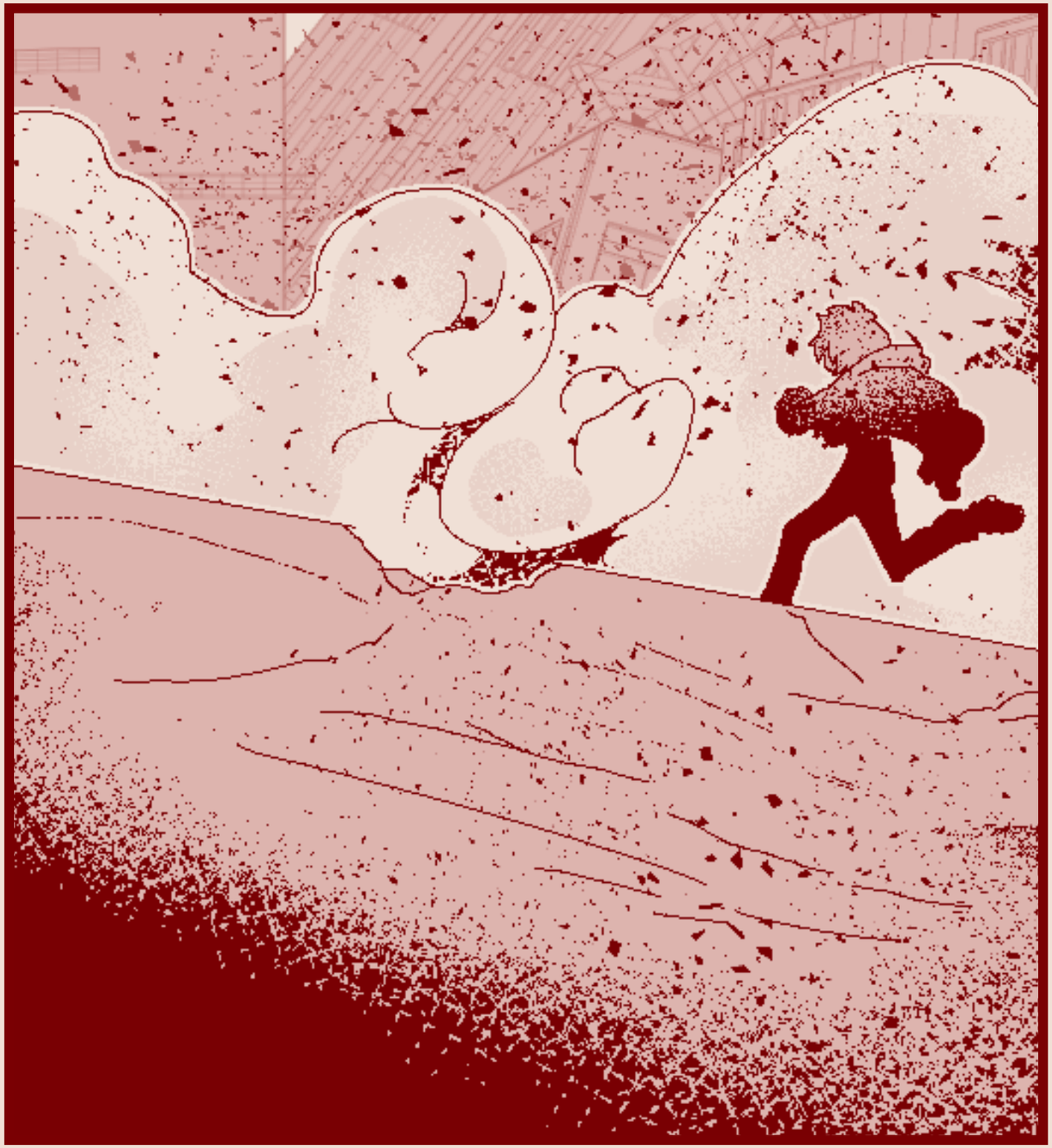
アンティラモンが静かに立ち上がる。
「時間だ。」
「…。」
「勇太、我々は半日後に再びデーモンと対峙する。」
「…。」
「ハシュマモンの攻撃で地形が変化し、今は、オグドモンへ繋がる道が2つある。
　1つは、我々が向かう攻撃で出来た更地。
　そしてもう一方は、ビルが重なりあってできた分かりにくいが隠し道のようなものだ。
　偵察をしたデジモンによれば隠し道の方には…叶がいる。　恐らく、デーモン側も分かっての見張りだろうな。」
「…俺にそんな事伝えてどうするんだよ…デジヴァイスもなければフェアリモンの脚だって使えない。
　ただの人間…子供だよ。」
「…勇太、諦めるな。
　君ならきっと我々が諦めてしまったものを手にする力がある。
　絶望を乗り越え、希望を掴む力が。」
「…ざけるなよ。」
　勇太がアンティラモンに掴み掛かる。
「ふざけんなよ！やったさ！やったんだよ！その結果がこれだよ！
　なんにもないただのガキがおだてられて自分はヒーローだって自分で…自分に言い聞かせて…！少しでも皆の期待に応えようって!!
　それで…それで…！」
　勇太の目から涙が堰を切ったように溢れかえってきた。
「フレアモンさんもクレシェモンさんも…！テリアモンもロップモンも！土井さんも!!!！…叶も…デビドラモンも…光も。
　全部…全部…。
　俺のどこにそんな力があるって言うんだよ。
　ルクスモンが俺をここに呼んで、今まで生き残ってこれたのも…全部、偶然じゃないか…俺が今ここにいるのなんて。」
「…本当にそうか？」
「…。」
「選ばれし子供達の選定の基準は如何にデジモンを進化させる力があるかだ。
　一定の力があればデウスエクスマキナがランダムに選ぶ。
　だが、その後にどうするかは自分達で選んだ事だ。
　今まで DW を救ってくれた子供達は全てそうだった。
　勇太、君が我々の為に戦ってくれたのは自分が選ばれし子供だったからか？」
「…っ。」
「先程、君は光を取り戻す事が正しい事が分からないと言ったな。」
「…。」
「では、君は光が闇に呑まれるあの時、なぜ光の名を叫んだ？
　君をあの時動かしたものはなんだ？」
「…。」
「私は…いや我々は自分の選択を信じられず今にいる。
　だが君は、強い。
　特別な力があるからではない、君の心が強さなんだ。
　考え、迷い、そして決心したら真っ直ぐに進め。
　君の名のように、日野 勇太。」
「…。」

7

「待たせたな。」
　アンティラモンが、先に戦闘の配置に付いていた竜馬達に合流する。
「勇太は…？」
「…来るさ、必ず。」
「それじゃあ、後輩君が来るまでにこっちも片付けちゃいますか！」
　目の前には、合せ示したようにデーモン達も現れていた。

8

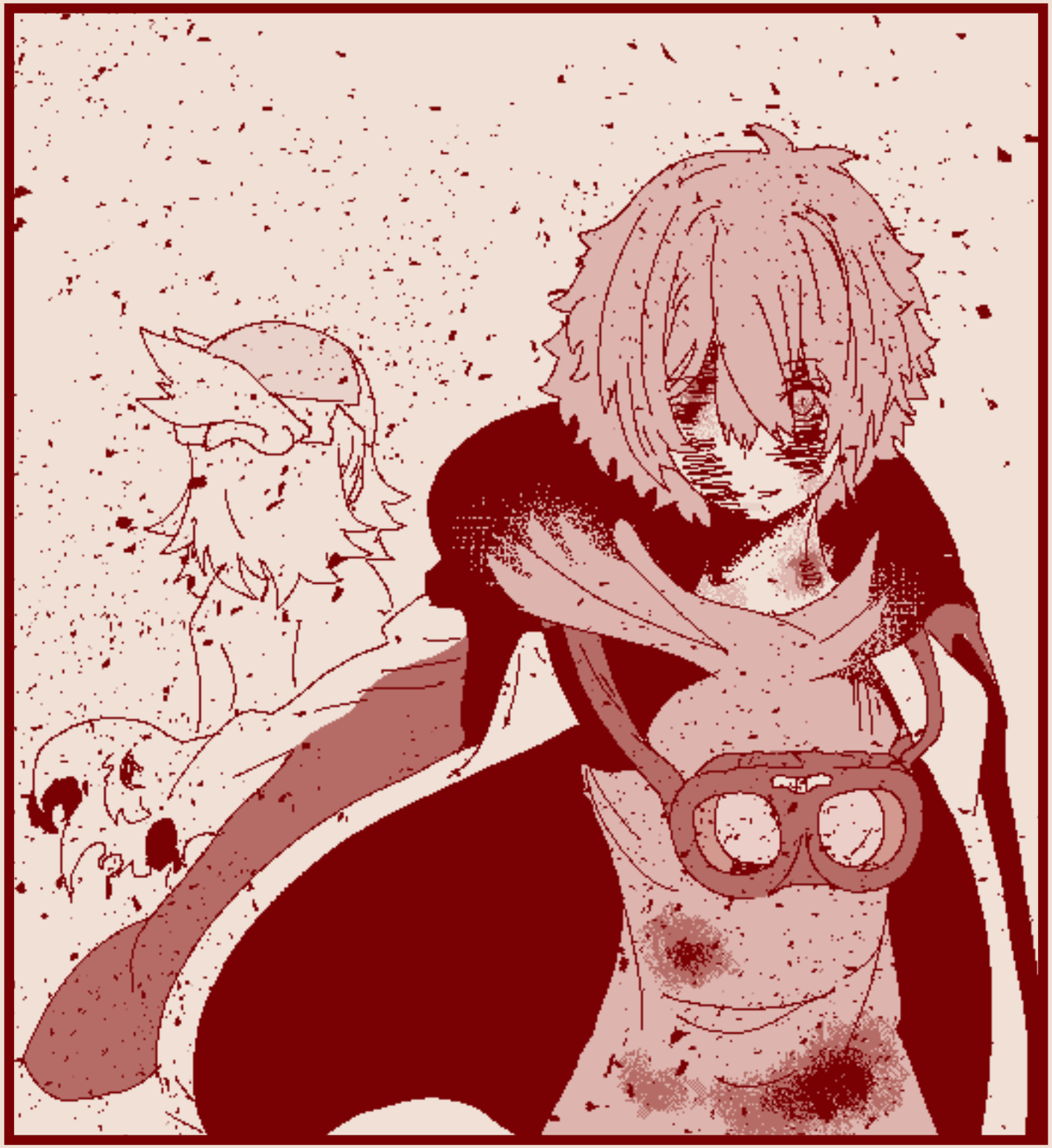
　爆音が鳴り響き、勇太のいるトレイルモンの客室も揺れるのを感じた。
　断続的な爆音と揺れで戦闘が始まったのが分かった。
「…っ。」
『君をあの時動かしたものはなんだ？』
　アンティラモンの言葉が勇太の頭の中でずっと繰り返されていた。
　勇太の中で何かが疼くものがあった。
　あの時、確かに感じた光に手を差しのべ、名前を叫んだ理由が自分にはあった。
　次の瞬間、爆発が目の前で起こった。
　デーモンとの戦闘の流れ弾だろうか、客室が壊れ外の景色が目に映る。
　硝煙と爆発、そして…。
「…。」
　勇太の足は自然と前に進んでいた。
「おい！小僧！あぶねえぞ！こっち来い!!」
　見張りのデジモンが勇太を手招きする。
　弱い心が、恐怖心が勇太の足を一歩そちら側に進めた。
『では、君は光が闇に呑まれるあの時、なぜ光の名を叫んだ？
　君をあの時動かしたものはなんだ？』
（あの時、光は泣いてた…俺にもどうすれば本当に光の幸せなのかなんて分からない。
　でも、自分の幸せの為に他の人達を犠牲にしようとしてたあの時…光は泣いていた。
　そんな…あんな涙の先に、本当の幸せがあるなんて俺には思えない…！
　叶も…そうだ…こんな終わりなんていやだ！
…こんな最後！最後は皆に笑っていて欲しいんだ！）
『考え、迷い、そして決心したら真っ直ぐに進め。
　君の名のように、日野 勇太。』
『お前は…名前のとおり…真っ直ぐ…。』
「おい！小僧!!!」
　勇太は、走り出していた。
　叶のいる、ヴォ―ボモンの待つ場所へ。
「勇太君!!!」
　勇太が走り出したのを見たすみれは止めようと動こうとするのをシンドゥーラモンが止めた。
「行かしてやんな、すみれちゃん。」
「何言って!?」
「昔のすみれちゃんにそっくりや。
　大事なもんがむしゃらに手伸ばしてんや。
　…だから行かせてやんな。」
「…っ。」
「ふざけんな！またお前のせいで大勢が!!」
　動こうとする味方のデジモンを止める幾つかの姿があった。
「行って！お兄ちゃん！」
「皆怖がっちまってるけど分かる！だってあの時あんたは俺達を持ってくれた！一緒のあの子を迎えにくんだろ!?」
「土井のおっちゃんが助けたならきっと何か意味があるんだろ!?」
　そこにいたのは、勇太がデーモンから救ったものと土井に救われたデジモンと人間であった。
「お前達！何してるのか分かってるのか!?」
「早く行って！」
「ウチの息子と同じ歳の子供助けなきゃあのジャスティモンに申し訳が立たねえよ!!」
「…っ！」
　勇太はその言葉に後押しされ走り出した。
　そこに迷いはもうなかった。



9

　フェアリモンの脚がない勇太は身体能力も平均より上に鍛え上げられたが、デジモンという大きな力の前では、12歳の平凡な少年であった。
　瓦礫が足を取り、更にそこかしこの鋭利な部分が身体を切って行く。
　爆炎が舞い、肌を焦がしていく。
　慄き、恐怖し足が止まりそうになるがそれでもただひたすらに走った。
　手薄であったがデーモンの部下であるデジモンも襲いかかりはじめた。
　ヴォ―ボモンもフェアリモンの脚もない、だけど止まらず走り続けた。
　せめて自分にある身軽さと、度胸でデジモンの攻撃を掻い潜りただひたすらに走り続けた。
　しかし、幾ら鍛え上げようが人間。
　遂には捉えられ、殺されようとするその一瞬であった。
　味方側のデジモンが、それを防いだ。
「チッ！なんか見覚えのある姿があると思えば赤毛のガキじゃねえか！」
　瞬時、勇太の脳裏には、先のデジモン達の憎悪が過った。
「行け!!ガキ!!!あの時はダチの為にもああ言ったがな!!止まるな!!!お前にだって大事なもんがあるからここまで来たんだろ!!!」
　声に連ねてなのか連鎖するようにデジモンが現れた。
「少年行け!!私達にだって自分の役割がある！あの時の一線で救われた恩！君が駆け抜ける瞬間だけは守ってやる!!」
「…っ！ありがとお!!!!!!!!！」
　勇太は叫んだ、一般の大声で発音する感謝の言葉でなく、絶叫に近い、どういった心情なのかは興奮状態の勇太自身にも分からない。
　しかし、その発音は正解であった。
　一般的な感謝の言葉には爽やかさを含むが、今、この場でそれは傲慢であったからだ。
　何かを訴えるようにより原始に近い叫びが正解であった。
　最低限、この場ではそう思えた。

なんで…。」
　叶は、信じられないものを見た。
　全部を失った筈の何もないただの人間の幼馴染が、死と隣り合わせの戦場をその身ひとつで走って自分の処へ向かって来ていた。
　自分はビルの10階程の高さにいる。
　なのに、身震いが止まらない。
　やって来るのだと確信があった、そして苛立ちがあった。
「ヒュドラモン!!!!」
「!」
　勇太の目の前の地面から地割れと共に巨大な三頭の植物の龍が現れた。
　周囲に瞬時に禍々しい草花が現れ、そして異臭が漂い始めた。
　身体が痺れ、動きが止まった一瞬、地中から伸びた蔦が勇太を切り裂く。
「ぐっ!!!!!!!!がああああ…ああああああ!!!!」
　蔦の威力で右手が吹き飛び、痛みで気を失いかけるが、それでも脳裏に光達の顔が浮かぶ。
　意識を取り戻し、飛ばされた勢いを利用しヒュドラモンの身体を走る。
　蔦が周囲全体に伸び、ビルとビルとを繋いでいる中から、叶に向かって行く。
「止まれるかあああああああああああああ!!!!!!!!」
　傷に回復フロッピーを充て止血し走り抜けた。

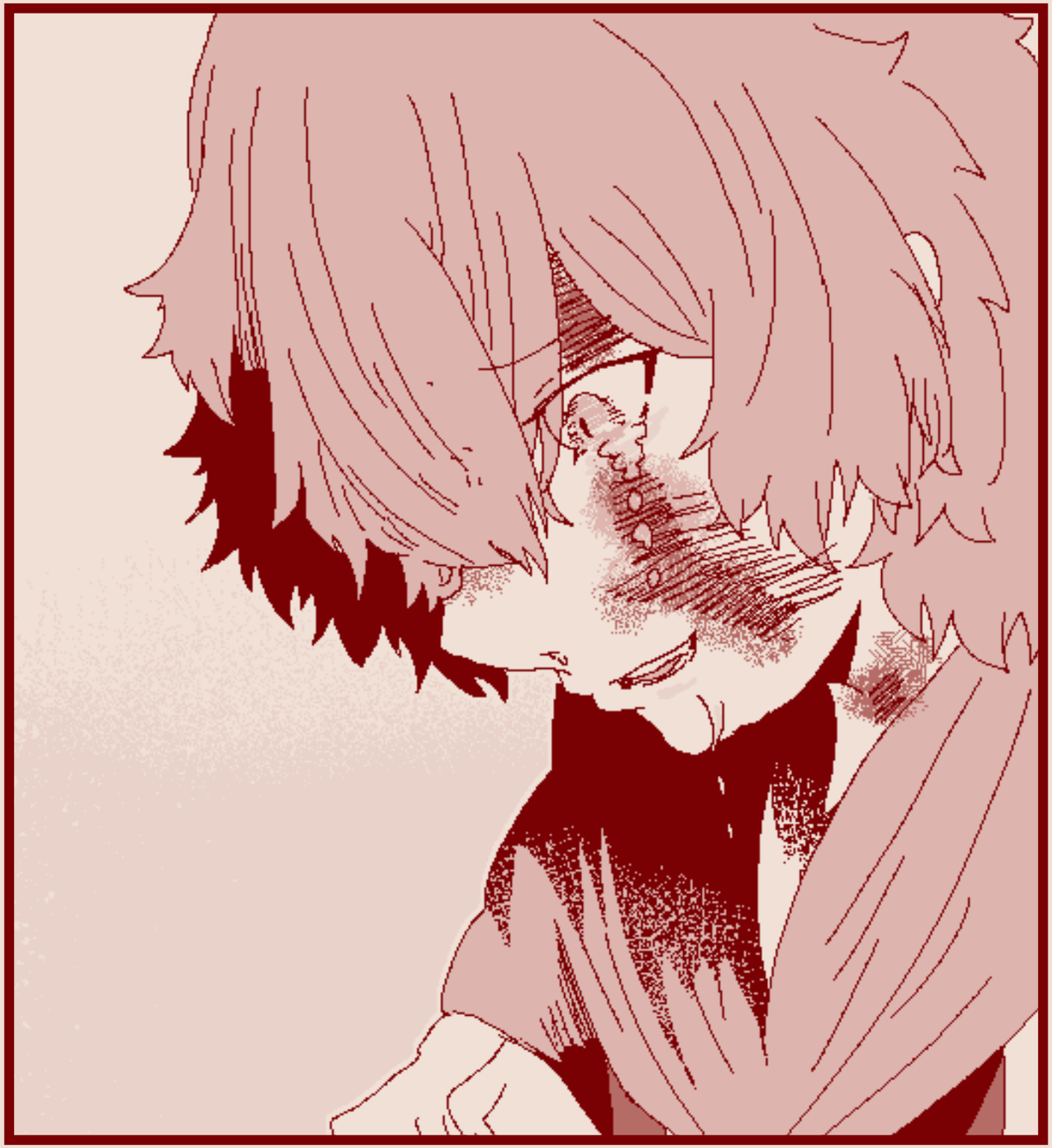


11

「はぁはぁ…。」
「…っ。」
　叶達のいるビルの屋上にヒュドラモンの蔦を伝い、転がりながら登った。
「何をしてる！ヒュドラモン！そいつを…早くどうにかしろ!!!」
　叶の指示にヒュドラモンが勇太に攻撃を加えようとした瞬間であった。
「ヘブンズナックル!!!」
　空から光の柱の様な光線がヒュドラモンを貫き、一撃でデータへ霧散させた。
「…君は。」
　光を纏いながら退化し、勇太の前にルクスモンが降り立った。
「やぁ、勇太。」
　叶も警戒しているが、何をしでかすが分からないルクスモンに動けずにいた。
「酷いね…。」
　ルクスモンは勇太の右手を撫でる。
　自然と、右手の痛みが引いていった。
「すまない、勇太…今の僕にはこれくらいしかできない。
　君は短期間で回復フロッピーを使いすぎて、データが損傷している。
　治すには相当のリソースが必要だ。」
「…ありがとう。」
「…謝る必要はないよ。
　誰が何と言おうと僕は君のパートナーだからね。
　それに、これで分かったろ？
　君の正義を貫くために必要なのはあの黒蜥蜴じゃない、僕だって事が。
　だからこれを。」
　そう言うとルクスモンはディーアークを勇太へ見せた。
「…。」
　勇太は静かにルクスモンを通り過ぎた。
「…後悔するよ？」
「…しないさ。」
「…。」
　それを聞き届けるとルクスモンは飛び立って行った。
「…ごめん、君ともいずれしっかりと向き合うから…、でも今は。」

　そしてついに、叶の前に勇太は立った。
　だが、
「そんな死に掛けの身体でどうするつもりだよ。」
「はぁはぁはぁ…。」
　勇太は顔すらも上げられないで息も絶え絶えでヨロヨロと叶の方へ向かって行く。
「チッ！フレイヴォ―ボモン！」
　叶の呼び掛けにフレイヴォ―ボモンが勇太の前に立ちはだかり、爪を向ける。
　その時、勇太ははじめて顔を上げフレイヴォ―ボモンの目を見据えた。
「ヴォ―ボモン…光とデビドラモンがまだ囚われてる。
　それに…皆がデーモンと…。」
「…。」

「…ああ、クソ。
　何言ってるんだろう俺…。
　そんな事、言いたい訳じゃないのに気ばっか焦って。」
「…。」
　フレイヴォ―ボモンの爪がゆっくり勇太の胸に伸びていく。
「なぁ…ヴォ―ボモン覚えてる？
　皆で…雪奈さんに手伝ってもらいながら麦茶売ったの？
　一緒にオーガモンに立ち向かったり、俺…今まで料理なんてやった事なかったけどヴォ―ボモン達が美味しそうに食べてくれるの本当に嬉しかったんだ。
　光のわがままに右往左往したりさ…辛い事もあったけど本当に楽しかったんだ。
　だから…だから。」
「…ウタ。」

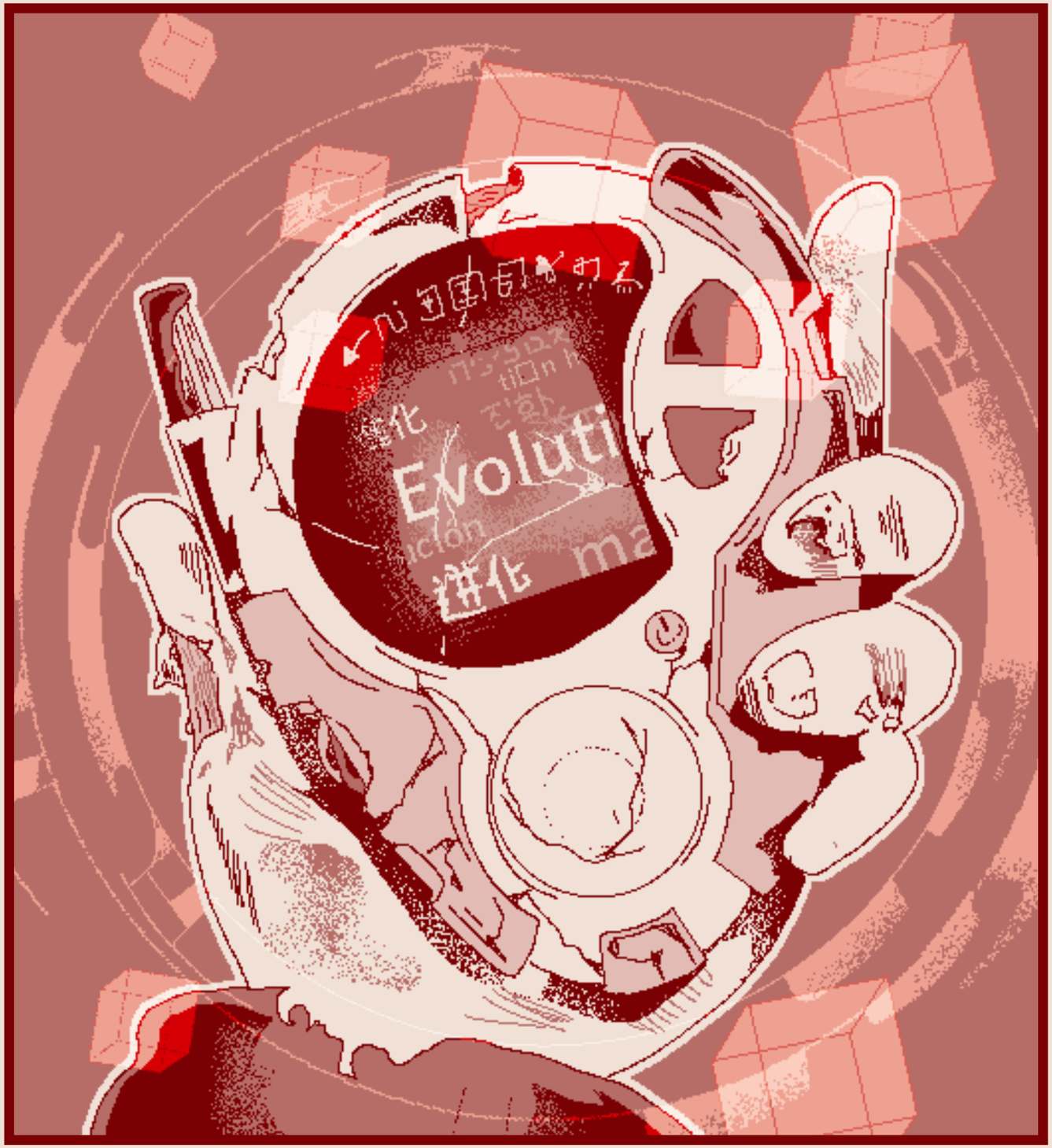


14

「俺…もっと皆といたい。
　いつか別れるとしてもこんな…こんなお別れ嫌だよ。」
「ユ…ウタ」
「皆が…ヴォ―ボモンが隣にいないの…寂しいよ。」
　勇太の目から自然と涙が出ていた。
　頬の傷に沁みて痛みが走ってもそれを止める事はできなかった。
「勇太!!!」
　フレイヴォ―ボモンの瞳に光が戻った。
「…っ！」

15

「馬鹿な!!!????なんで!!!???」
　気付けばデジメンタルは剥がれ、ヴォ―ボモンの姿へ戻っていた。
　ヴォ―ボモンは勢いよく勇太に抱きつき、それを勇太は抱きとめた。
「ごめん！ごめん！勇太!!」
「ヴォ―ボモン…！」
　ヴォ―ボモンの目から勇太以上の涙がこぼれ落ちていた。
「クソ！でもデジヴァイスはこっちにある！進化できないお前らなんかに!!」
　叶の絶叫を聞き、ヴォ―ボモンは涙を拭い、勇太の横に並び立つ。
「デジヴァイスなんて関係ない！僕は…勇太が！
　自分達でパートナーである事を選んだんだ！
　選ばれし子供とパートナーデジモンなんて関係ない！
　誰でもない僕達自身が！選んだんだから!!」
「ヴォ―ボモン…。」
「だから勇太！今までみたいに声を上げて！僕を信じて!!!」
「…ああ!!」



16

「!??」
　勇太とヴォ―ボモンの声に呼応するようにデジヴァイスが叶の手から光となり消え、勇太の手に現れた。
「…ありがとう。
　君もずっと、俺達を信じてくれたんだね。」
　勇太のデジヴァイスへの呼び掛けに呼応するように、デジヴァイスにヒビが深く刻まれていったが、同時に劇しい光が漏れ始めた。
　今まで表示されてこなかったディスプレイには多様の言語であったが、ただひとつ刻まれていた。

『進化』

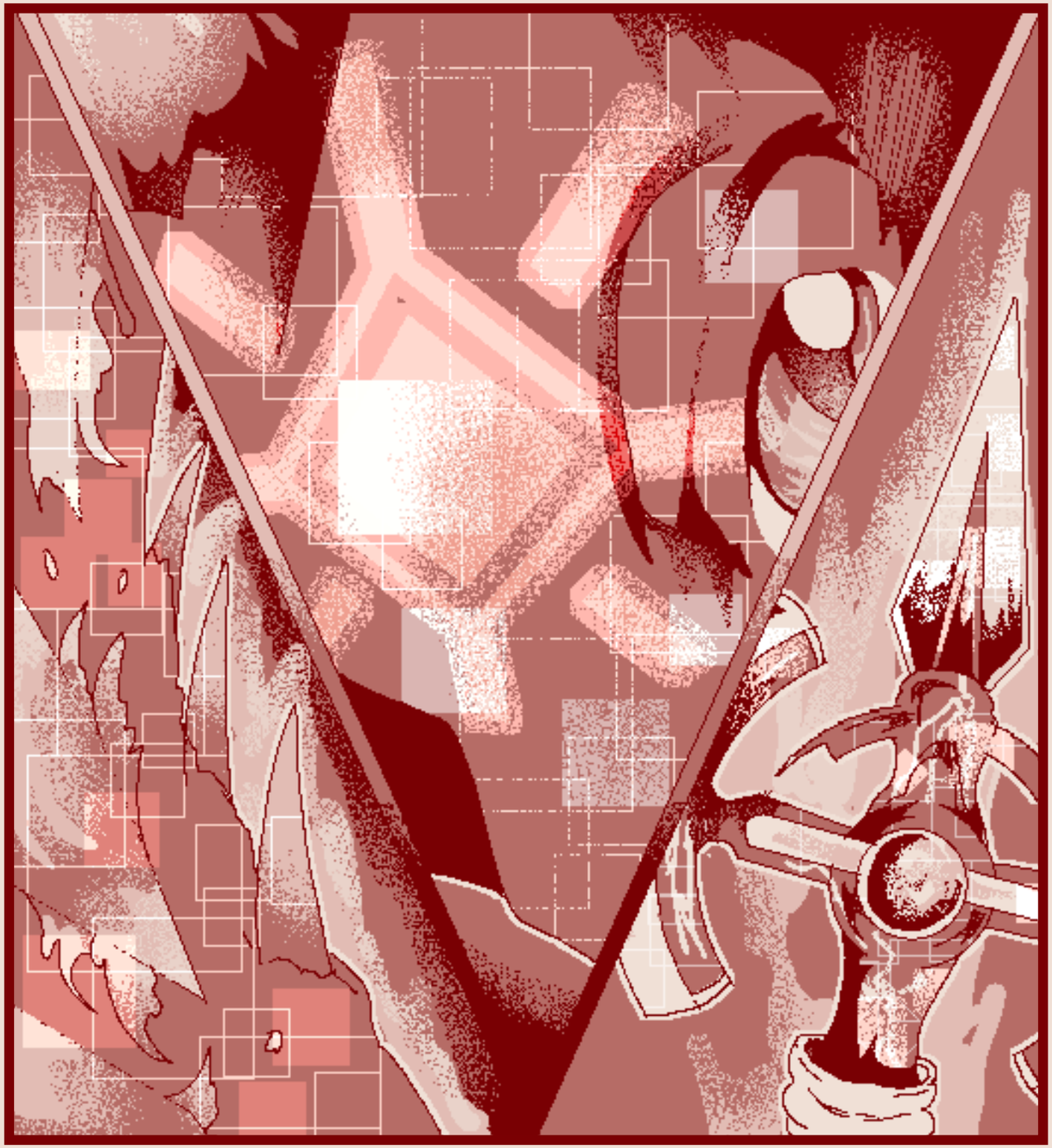
17

「勇太!!!」
「ああ!!!」

「「ヴォ―ボモン！ワープ進化!!!！」」

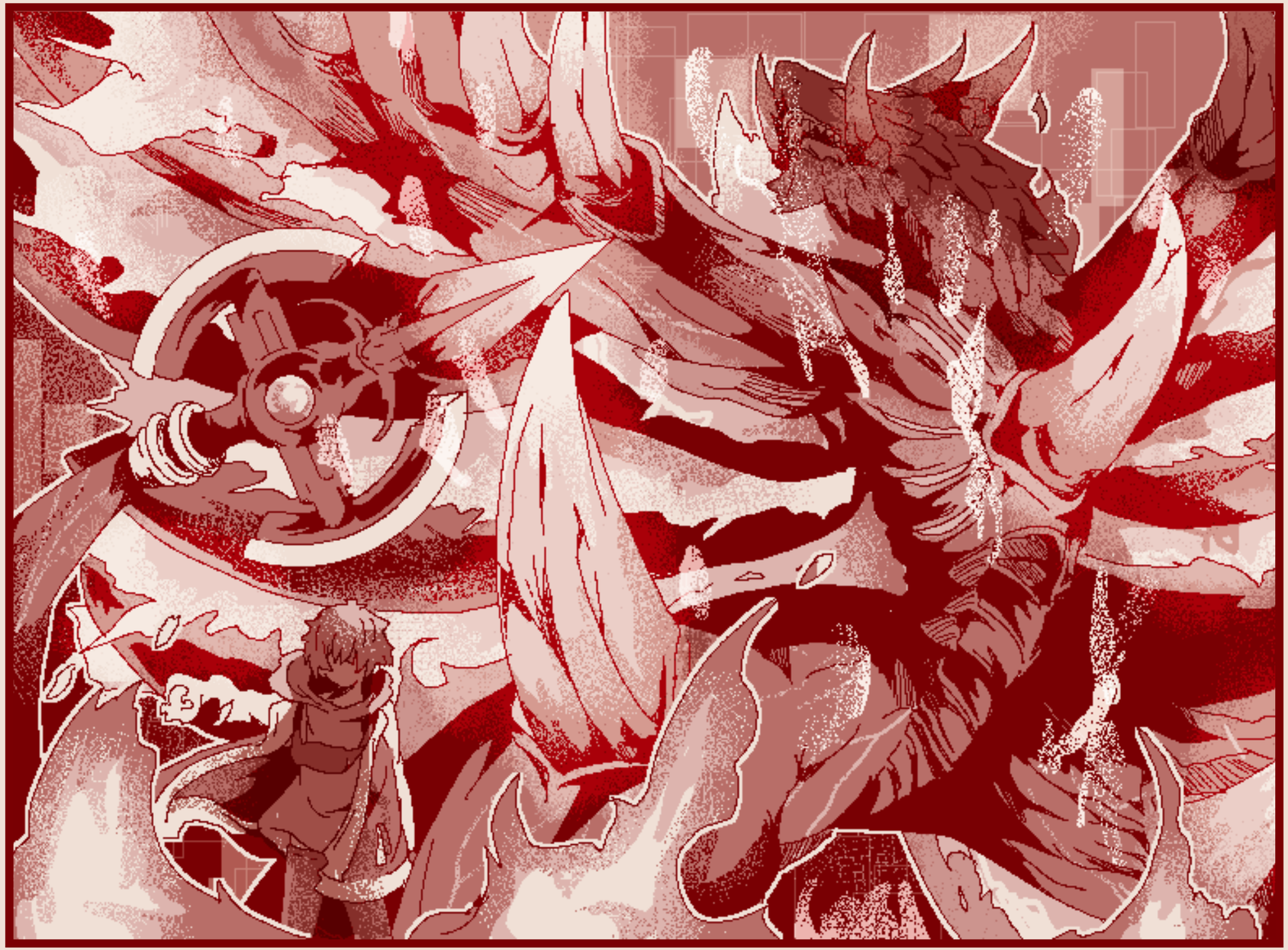
　勇太がデジヴァイスを掲げると、ヴォ―ボモンのテクスチャが剥がれ身体から眩い光を放ちはじめた。

導かれるように光のある天へヴォ―ボモンが登っていく。



ヴォ―ボモンの身体が一度データへ分解され、より強く、より大きく再構築されていく、炎を纏い劇しい光となる。

拡散した光は、光球となり縮小し、そこに巨影を映し出した。

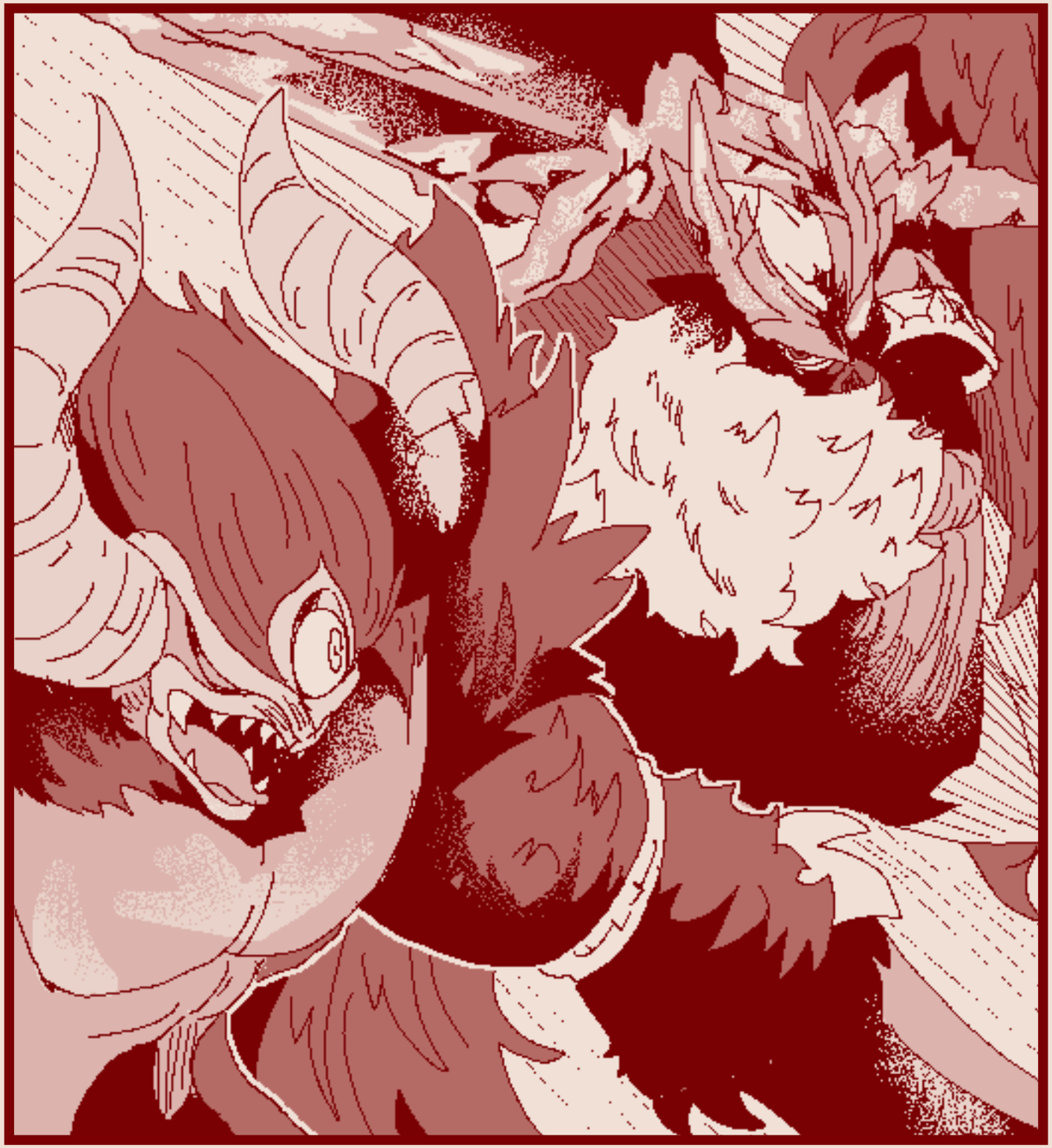


「原初よりこの地を支える大いなる灼熱の龍。
　今、その偉大なる炎で世界を照らせ!!!」

『これが俺達の選んだ答え!!!究極体!!
　ヴォルケニックドラモン!!!!!』

　そこには、ラヴォガリータモンより巨大で雄々しく、そして炎の化身とばかりに燃えさかる炎を纏った龍がいた。

「なんで…！なんでお前なんだ!!!!!ブイモン!!!」
「ああ!!!！ブイモン！ワープ進化!!!」
　ブイモンがワープ進化をし、インペリアルドラモンへとなる。
　2頭の龍がお互いを見据える。
「行こう！ヴォルケニックドラモン!!!」
「行こう！勇太!!!」
　ふたりの声が重なりインペリアルドラモンへ向かって行く。



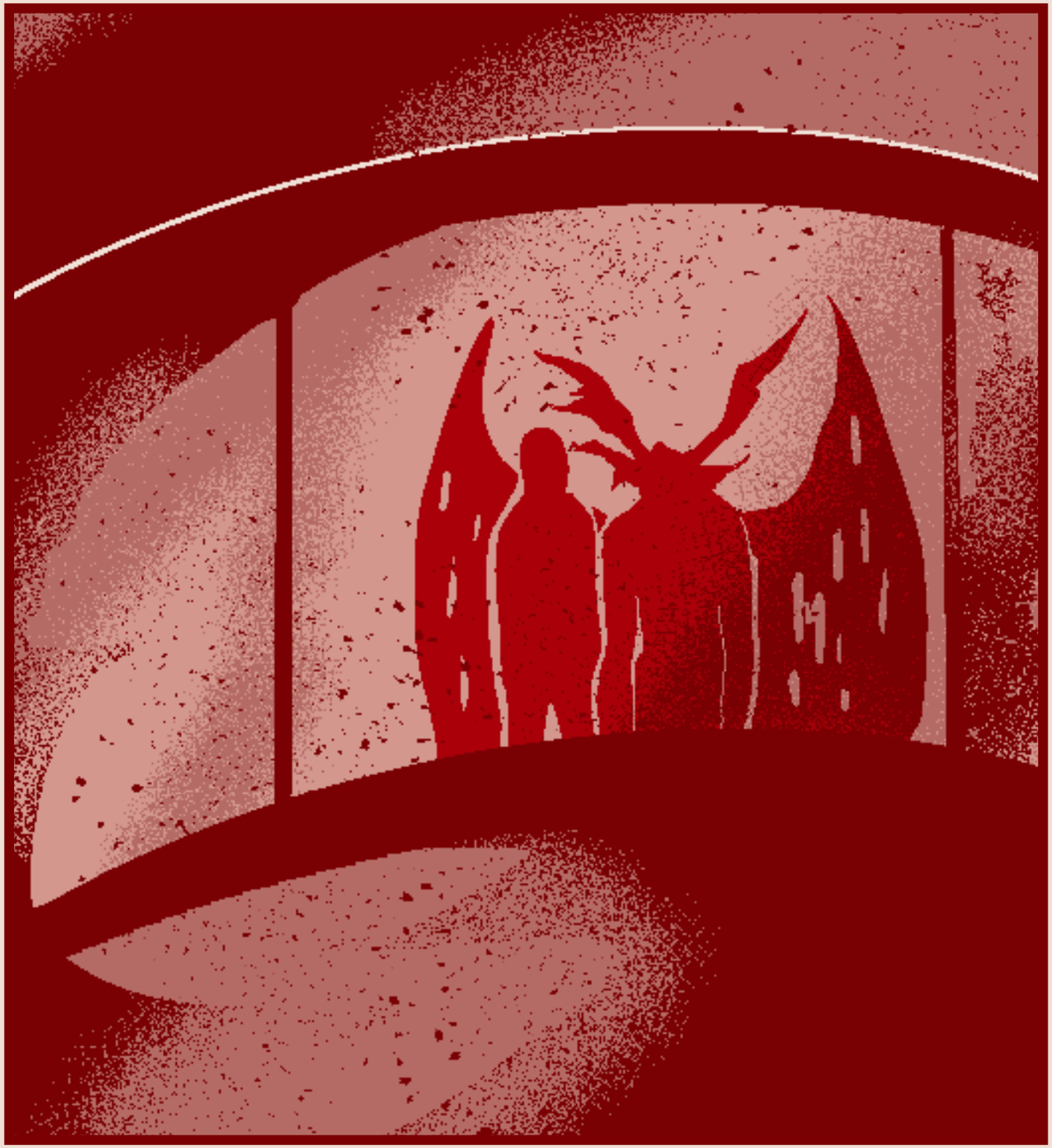
「あの炎は…。」
　ケルビモンが遠くで巻き上がる炎柱を眺めた。
「ああ…。」
　それに、竜馬が応えた。
「余裕だなおふたりさん!!!??」
　デーモンへの猛攻を掛けたケルビモン達は一気に、圧していった。
　ゼクスグレイモンの攻撃を捌き、一瞬の隙にカラテンモンが背後に回り込む。
「完全体ごときで!!!」
「いいや！違うね!!!」
「颯乃ちゃん！」「雪奈!!」
「「デジクロス!!!!!!」」
　カラテンモンの身体に鎧の様にヘクセブラウモンが纏われていく。
「カラテンモン X2!!!」
「ヘクトエッジフェザー!!!」
　剣から放たれる無数の氷の刃がデーモンを串刺し吹き飛ばす。
「やったか!?」

「まだだ!!!いいぞ!!!人間共!!!そのパートナー達!!!」
　氷ついたデーモンが一瞬で炎を纏いその氷を解かす。
　そして、より頑強な姿へ進化していった。
「超究極体…さぁこれで最後だ!!!」
　圧倒的な威圧感にケルビモン達の動きが止まっていた。
「どうした慎平？ビビってちびった？」
　良子の軽口に、慎平が応える。
「はっビビってるに決まってるだろ…、でもよぉ。」
「ああ、勇太だって戦っている。
　ここで私達が引く訳にはいかない…！」
　ケルビモンがデーモンへ向かって行った。

24

「勇太あああああああああ!!!」
「叶ええ!!!!!!!!」
ヴォルケニックドラモンとインペリアルドラモンがぶつかり炎が上がる。
最後の決戦の火蓋が降ろされた。

稼働を一時的に停止したオグドモンはその巨体をビルの廃墟に埋もらせ静かに佇んでいた。



そして、オグドモンの内部から勇太達を眺める2つの影があった。